

ラーニングコモンズ再考： アクティブラーニング支援から学びのコミュニティ支援へ

米澤 誠

はじめに

各大学でラーニングコモンズが整備される中、箱モノとしての学習環境だけではなく、そこにおける学習支援が重要であるといわれつつある。しかし、ラーニングコモンズという場を用意すること以外に、図書館員としては何ができるのであろうか。

大学によっては、大学図書館とは別の建物にラーニングコモンズを設置し、学習支援に関する専任教員をそろえて、学生へのアクティブラーニング指導を行い始めている。

しかし、ラーニングコモンズを擁した大学図書館においては、だれがどのようにして学生のアクティブラーニングを支援すればよいのであろうか。図書館員が教授すべきなのであろうか。そうでないとしたら、大学図書館はアクティブラーニングにどのように関わることができるのであろうか。このような問題意識から、本稿では、大学図書館におけるアクティブラーニング支援の方策について考察してみたい。

1. 学びの構成要素

ラーニングコモンズとアクティブラーニングの関係を整理するために、学習環境デザインの観点からみた「学び」の構成要素を確認してみたい。

美馬・山内両氏によると、学習環境の要素としては、空間・活動・共同体の3つがあるという¹⁾。

空間（もしくは場）は、学習に必要な人間の行為を物理的に保証する重要な要因である。多人数のグループワークやプレゼンテーションなどを効果的に行うためには、ラーニングコモンズのような設備が好まれるが、一人で自習するにはむしろ静粛な学習室の方がふさわしい。

学習を生み出すために直接的なきっかけとなるのが活動（もしくは学び方）である。ゼミ学習のためのグループワークや、授業の試験対策をするための勉強会、研究会・発表会のためのプレゼンテーション、公公務就職のための試験勉強などがその例にあたる。

学習活動を一時的なものではなく持続的に行うには、それを支える共同体（もしくはコミュニティ）が有効

である。ここでいう共同体とは、目標を共有しその実現のために自発的に集まった人々のことである。同じ研究室の仲間、同じ試験を受験する学生グループ、自主的なゼミや研究会、サークルなどをイメージするとよいであろう。（図1）

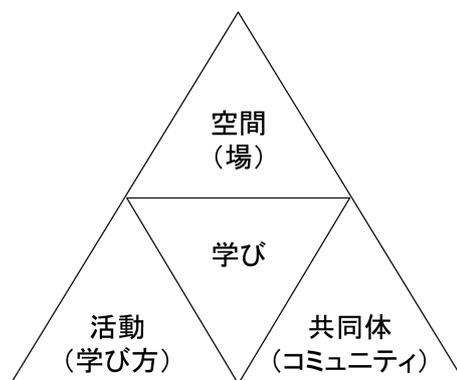


図1 学びの構成要素

1 美馬のゆり、山内祐平『「未来の学び」をデザインする』、東京大学出版会、2005年

2. 学びの変容

このような学びの要素を、従来の図書館における閲覧室や学習室での学びに即して考えると、空間（場）は「閲覧室・学習室」、活動（学び方）は「独習や閲覧」、共同体（コミュニティ）はこの場合はなくて、活動の主体となる「個人」であることが分かる。

このような従来の学びが、ラーニングコモンズという空間の出現とアクティブラーニングという学び方への転換により、新しい学びに変容してきているのである。（図2）

3. 学びの強化策

従来の学びと新しい学びの構成要素をこのように整理してみると、それぞれの学びでの強化策の構成が明確になってくる。（図3）

すなわち、従来の学びにおいては学習室・閲覧室な

どの施設整備の方策、それに加えて個人学習の能力を向上させるための学習支援の方策が必要となる。この場合の学習支援策は、レポート作成法や情報探索法の教授が主な内容となる。東北大学附属図書館でも早く

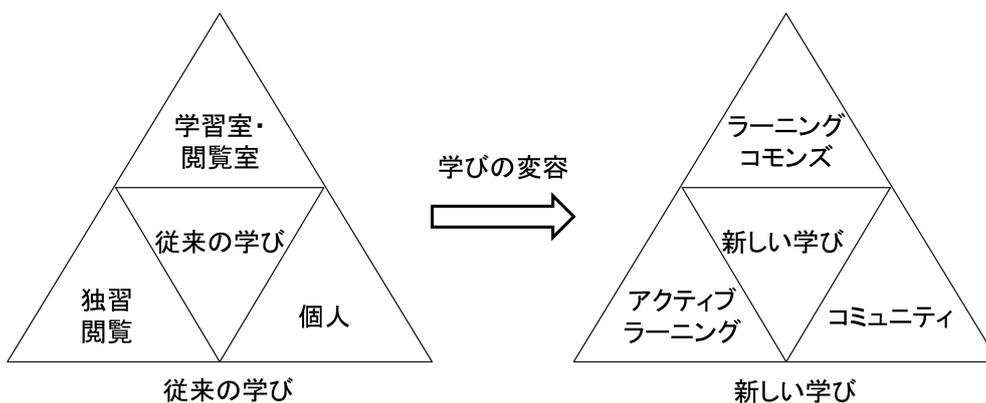


図2 学びの変容

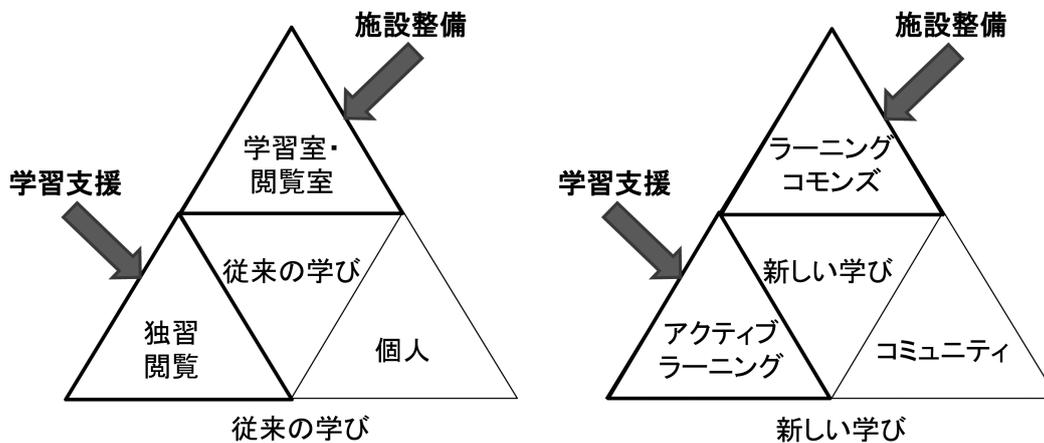


図3 学びの強化策

からこの種の学習支援を行っており、一定の成果をあげてきたと考えている²。

そして新しい学びにおいてはラーニングコモンズなどの施設整備の方策，それに加えてアクティブラーニングに関する学習支援の方策が必要となる。この場合の学習支援策は，さまざまなアクティブラーニングの手法に関する教授や，新しいICT機器の使用法・活用法に関する指導などが主な内容となる。このような内容の学習支援の場面においては，残念ながら従来の図書館職員のスキルを發揮しがたいというのが，冒頭に述べた問題意識につながるのである。アクティブラー

ニング技法の教授は，教員の領域に属するものであり，大学においてはまず正課の授業の中で教授すべきなのであろう。大学教員だとしても実践を試み，学び続けなくてはならない教授法なのである³。

しかし，新しい学びにおいては，もう一つの強化策があることに気が付くであろう。それは，コミュニティの強化なのである。従来の学びにおける学習主体は個人であり，その個人を強化するという方策は，残念ながら困難である。一方新しい学びにおける学習主体のコミュニティに関して強化策を講じる余地は，まだまだあるのではないだろうか。

4. 学びのコミュニティ支援

東北大学の図書館にラーニングコモンズを開設して以来，それ以前に比べて学びのコミュニティが増加して多様化してきていることを実感している。そもそも，コミュニティが活動する空間のなかった図書館であったわけだが，ゼミや研究会・勉強会が学習活動を行うだけでなく，部活・サークル活動を行う場所，留学や就活のサポーター，ボランティアやNPOの活動場所としても活用されてきている。また留学生のサポーターが活動することに伴い，留学生たちのコミュニティも

日常的に居つき学び合う場所となってきたのである⁴。

そのような活用状況を見つつ，どのようなコミュニティがあるのか，どのようにしたら活用しやすくなるのか，利用してもらえるのかを，日々模索している状況である。大学内に存在する様々なコミュニティを知り，活用の可能性を探ることが，大学生の新しい学びを強化する有力な方策であると考えているのである。

(よねざわ まこと，附属図書館事務部長)

2 吉植庄栄，東北大学附属図書館が開講してきた情報探索・アカデミックライティングの全学教育科目12年間のあゆみ：記録と展望，東北大学附属図書館調査研究室年報，第3号，2016年，pp43-53
3 中井俊樹編著『アクティブラーニング』，玉川大学出版部，2015年
4 米澤誠，学習支援を広め高めるラーニングコモンズ：グローバル学習環境という挑戦，東北大学附属図書館調査研究室年報，第3号，2016年，pp55-59